▌計画の背景と課題

現校舎は一番古い棟で築50年を迎え、劣化が目立ち修繕費が嵩んでいる。他の公共施設と比較しても老朽化が進んでおり、公共施設等総合管理計画においても施設更新の優先度が高く設定されている。小離島地域特有の課題や利島村の学校づくりの課題を整理した。

▌小離島地域特有の課題

○小規模離島自治体

利島村は人口300人、1島1村で、島内で一通り公共施設を確保しなければならない。一方、厳しい財政をふまえ、人口300人の規模に応じた**効率的な施設整備**が求められる。

○平地がないという特殊な地形

傾斜地で平地を造成しなければならず、狭く**急勾配な道路**や**段差のある地形**など、**工法や工事計画、工期等に大きな工夫を要する。**

○物流や職人の確保

島内で**作業員等の確保が難しく**、資材も本土から海上運送となることから、**労務費・資材費が割高になる。**

利島村の学校づくりの課題

村民の学校教育への関心と当事者意識の向上
高校が無く、中学卒業後に教育の関心が離れる傾向があり、村全体で育てる意識を高める

学校と地域の関係づくり
新型コロナにより、学校と地域の関係が希薄に。ポストコロナ時代、教師の働き方改革と密な地域連携の両立が必要

「サステイナブルな利島」の実現
水不足で悩まされてきた歴史を踏まえた取組を環境教育へとつなげ、SDGsを具現化できる児童生徒の育成

これらの課題を踏まえ、先導的開発事業では以下の「**4つの視点**」を定めて基本計画の検討を進めた。

先導的開発事業における４つの視点

- 教育ＤＸにより学制発布以来の転換点にある学校教育を実現する施設環境
- 水不足の歴史等を踏まえ、「サステイナブルな島」を形成するための学校施設
- 村民全員にとって、生涯を通した学びの拠点となる学校施設
- 村民の心のよりどころとなり利島のシンボルとなる学校施設

▌新しい校舎づくりの目標

新教育大綱のもと、学校関係者の意見をふまえた協議会の議論を通して、「**利島小中学校の新しい校舎づくりの目標**」を定めた。今後、事業を進める指針とする。

利島小中学校の新しい校舎づくりの目標

15の春の自立を支え、利島良くする“自燃性”を育むための、「ど真ん中の学校」づくり

1．予測不可能な時代にあらゆる場所で活躍できる利島っ子が育つ学校づくり
－子どもたちの自立を導く、新しい時代の学習環境の実現－

2．利島だからできる教育活動を通して、教職員も育つ学校づくり
－文化施設や教育委員会事務局を集約する等、「学びの場」を学校に集約－

3．「村全体が学校」となる複合化と役割分担のもとでの学校づくり
－複合化と役割分担の明確化による、学校の「脱・フルセット化」－

4．次の１００年の利島村づくりの象徴としての学校づくり
－サステナブルな利島の発信拠点となる学校－

▌検討の経過

基本計画を検討するために、学校関係者や保護者代表、村民代表に各分野の有識者を加えた「新しい時代の利島の学校づくりのための協議会」において、教職員アンケートやヒアリング、村民ワークショップなどで把握した意見要望を共有し、学校施設のあり方を協議した。

年月	協議・調整の経緯	
令和５年８月	協議会キックオフ*	協議会委員の顔合わせ 利島小中学校視察
	教職員ヒアリング	利点・課題、施設への要望、ICT環境等へのヒアリング
10月	教職員アンケート	施設整備・離島の課題、各室の要望等の抽出等
	第一回協議会*	調査状況の報告、ヒアリング・アンケートの結果報告、先進事例視察報告、学校づくりの目標案ほか
	村民ワークショップ	施設の利点、課題、将来像について意見交換
11月	村内協議	公共施設の再編に向けて
令和６年１月	子どもたちからの提言	利島の未来について子どもたちから提言
２月	第二回協議会* 第三回協議会*（書面）	先進事例視察報告、報告書案への意見

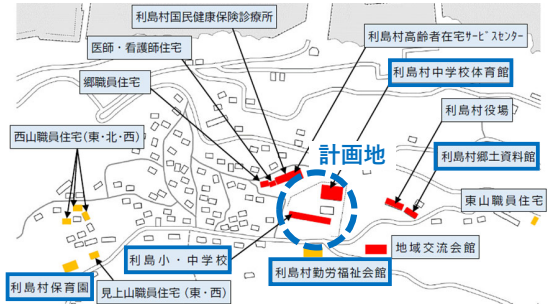
＊新しい時代の利島の学校づくりのための協議会
協議会委員９名、有識者５名にて構成

▌施設計画の方針

○計画対象施設と機能

学校教育と社会教育の環境改善と現代化を同時に果たす複合施設とすることで、公共施設の効率化を図る。

【計画対象施設】
- **校舎並びに体育館**
- **教育委員会事務局**
- **勤労福祉会館の図書機能**
- **放課後児童クラブ**
- **郷土資料館**
- **利島保育園の給食機能**

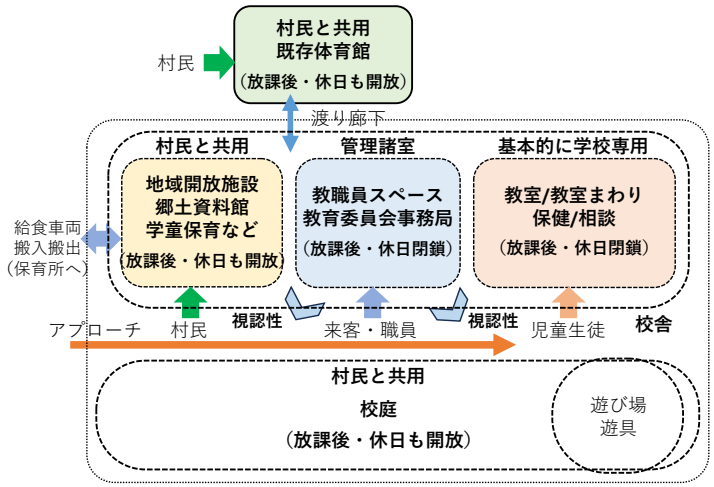


現在の計画地周辺公共施設

○新しい施設の基本構成

新しい施設は、教育DXを促すと同時に、同時に村民のコミュニティ拠点として利用しやすいようにする。

学校の職員室と教育委員会事務局は連携を考慮した配置とする。教室まわりは学校専用を基本とする。地域開放が想定される図書館や給食施設、特別教室はそれぞれ関係付けて配置し**全村民の学び場**とする。



新しい学校施設の基本構成イメージ

検討結果　先導的開発事業計画で示した“４つの視点”で基本計画の検討結果を整理する。

○教育DXにより転換期にある学校教育を実現する施設環境

教室まわりの考え方

一人一台端末の実現により、自分のペースやスタイルで自ら学びを進めていきやすくなった。極小規模校は個別最適な学びに取り組みやすいが、従来の黒板中心の教室では、一斉指導から抜け出しにくい。本事業を契機に、物理的な環境を個別最適かつ協働的な学びの場に転換する。

縦のつながりを生かした教育活動ができるフレキシブルな教育空間とし、全体を連続した空間としつつ、壁や音が仕切れる小部屋で空間を分節することで、子どもの活動や状況に応じた学びの場所を自ら選ぶことができるようにする。そして多様な学びを支える多様な家具を用意する。

教室まわりのイメージ

管理諸室の考え方

義務教育学校の強みを生かし、教職員の協働性・同僚性を高める必要がある。校務等のデジタル端末をクラウド化することで、場所を限定せず、リラックスした雰囲気で協働できるラウンジ空間を職員室の中心に据える。

職員ラウンジのイメージ

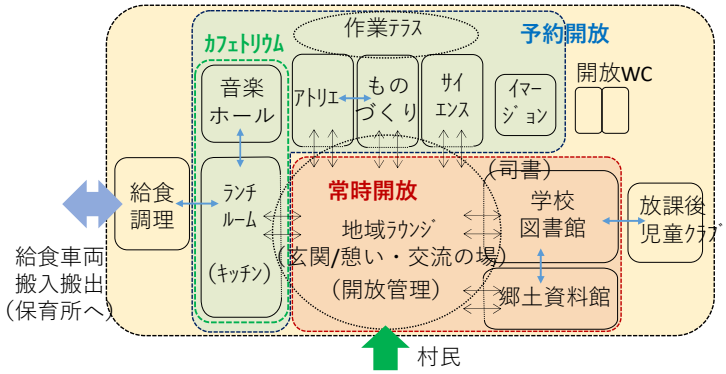
○村民全員にとって、生涯を通した学びの拠点となる学校施設

地域開放施設の考え方

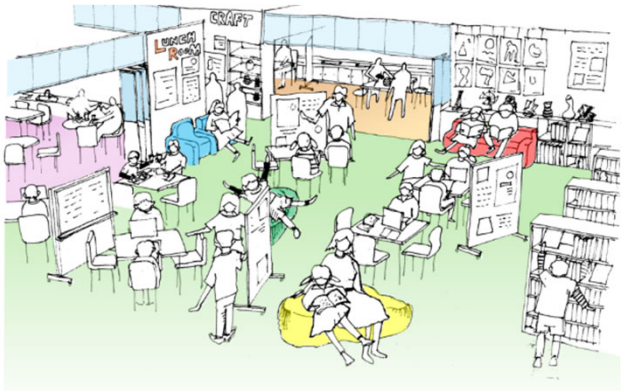
極小規模地域の学校施設は体育館や校庭、図書館など、住民のコミュニティ活動の場として欠かせない施設である。基本計画では学校施設を積極的に村民の活動空間、生涯学習空間として活用することで、村全体の公共サービスを高めるものとした。地域開放施設をまとまりを持たせて配置し、教室や管理諸室と分けることで、休日や放課後も単独で開放できるようにする。

学校図書館や郷土資料館のほか、村民が児童生徒と一緒に給食を食べられるランチルームを用意する。特別教室は村民と学校の共創空間とする。全体をつなぐ場として地域ラウンジを用意し、村民と学校のふれあい空間とする。

にぎわい創出のためのソフトの取り組みや教職員の負担軽減に配慮する。



地域開放施設の構成イメージ



地域ラウンジのイメージ

○村民の心のよりどころとなり利島のシンボルとなる学校施設

利島の港に着き、中央にそびえる宮塚山を望むと、生い茂る藪椿の中に建つ利島小中学校の施設が正面に見える。

基本計画では配置計画を５案作成し、それぞれ平面計画の可能性を検討した。今後、総事業費や工期、建て替え中の配慮等を含めて総合的に検討を進め、島民の心象風景に刻まれる、利島のシンボルとなる建築としてデザインする。

利島港からみた宮塚山と利島小中学校

○「サステイナブルな島」を形成する学校施設

村の生活で欠かせない水資源を最大限大切に利用できる施設とする。節水、雑排水等の再利用、雨水利用を図る。また省エネを図ると同時に太陽光等の自然エネルギーで創エネに取り組む。

○事業の具体化に向けて

小離島・極小規模地域では、資材高騰や厳しい財政状況、重機等の搬入の難しさ、建設可能面積の少なさといった制約があるが、以下の特徴を生かし、具体化を進めていく。

- 学年毎の在籍数の変動と9年の成長過程を踏まえた教室
- 少人数を最大限生かすための教育DX環境
- 島民の一体感を高める地域開放と給食施設の共用化
- 学校との連携強化を図る教育委員会事務局の校内設置
- コンパクトな集落に応じた公共施設の役割分担と複合化
- 島の課題をふまえた建設生産性の高い構造種別と工法